

宗教と非宗教の間

—テイラー対ハーバーマス—

Between Religion and Non-religion

— Taylor vs. Habermas —

辰 巳 伸 知

要 旨

イスラム教徒によるフランスの風刺新聞社襲撃は、「〈表現・言論の自由〉原理主義」と「イスラム原理主義」とが宥和不可能な対立にはまりこんでいくような状況をつくり出している。一般に宗教的市民と世俗的市民の「共棲の作法」を探るためのヒントは、公共圏における宗教の位置づけをめぐるチャールズ・テイラーとユルゲン・ハーバーマスの対立する所説に見いだせる。

宗教を特別視すべきではないとするテイラーの主張と、宗教的言語と世俗的言語を区別し、前者の後者への「翻訳」を要請するハーバーマスの主張の対立が止揚可能かどうかを問うことが課題となる。

キーワード:「〈表現・言論の自由〉原理主義」, C.テイラー, J.ハーバーマス, 「翻訳」という「条件」

1. 「〈表現・言論の自由〉原理主義」

本年2015年1月7日、パリの中心にある風刺週刊紙『シャルリ・エブド』本社が、二人の兄弟に襲撃された。彼らは、銃を乱射しながら「神は偉大なり」「預言者ムハンマドの敵を討った」などと叫び、同紙編集長を含む12人(うち2人は警察官)を殺害した。この週刊紙は、かねてより再三にわたってイスラム教や預言者ムハンマドの風刺画を掲載しており、パリ近郊に住むこの二人の兄弟は、イスラム教徒やムハンマドへのこのような侮辱(特にムハンマドの戯画化は、イスラム教の教義においては図像化や形象化することすら禁じられていることを考えるなら論外だろう)に対する報復として襲撃を決行したという。結局この兄弟は、二日後に警察との銃

撃戦と特殊部隊の突入の後に射殺された。

この事件の直後から、世界各地で表現の自由に対するテロリズムを非難する声が上がった。特に事件が起こったフランスでは、1月11日に各地で犠牲者を悼みテロリズムを非難する大規模な行進が実施され、フランス内務省の発表ではフランス全土で370万人が参加したという。特にパリでは、参加者数が160万人と推計され、そのなかにはイギリスのキャメロン首相やドイツのメルケル首相等、各国首脳や政府要人の姿があった。

この行進をかりにデモと位置づけるなら、各国の権力者が肩を並べてそのなかにいるということの奇妙さ(それぞれ自国でマイノリティ集団を抱えている権力者たちによる、「テロとの戦い」をあらためて宣言する政治的パフォーマンス?)や、そもそも誰に向けて、どういう集

団に対してどのようなメッセージを発しているのかという疑問(フランスが長年培ってきた表現や言論の自由といった理念を守るために、その理念を解しない敬虔なイスラム教徒のような未開人に対するメッセージ?)を感じさせる。とはいえ、残忍な暴力によって命を奪われた人々に対して哀悼の意を表したり、表現行為や言論を暴力によって封殺しようとする行為に対して抗議の意思を表明したりすること自体に、何か問題があるなどとは言えないだろう。しかし、行進に参加した群衆がいたところで「私はシャルリだ(Je sui Charlie)」と書かれたカードやプラカード、横断幕を携えていることには、そして全員が自らを『シャルリ・エブド』と同一化しているとは限らないにせよ、160万人もの人々の行進のシンボルにその言葉がなっていることには違和感を感じざるをえない。

そして、1月14日には『シャルリ・エブド』は事件後はじめて特別号という形で新聞を発行し、今度はムハンマドが涙を流しながら「私はシャルリだ」というカードをもっている風刺画を掲載した。この行為に対しては、世界の多くの場所でのイスラム教徒が自分たちに対するさらなる侮辱、あるいは挑発ととらえ、反フランスのデモが頻発している。またそれとともに、表現や言論の自由に対するテロリズムを非難する声とともに、表現や言論の自由は無制限に認められるべきなのかという点をめぐる議論も活発化してきている。実際、各国の主要メディアも、この風刺画を転載するか否かについては対応が別れている。しかし、本国フランスでは大差はついていないとはいえ、いかなる場合においても表現や言論の自由は無条件に認められねばならないとし、『シャルリ・エブド』のといった行為を肯定的に見る意見が依然多数を占めている。否定的意見にしても、ムスリムを刺激して厄介ごとを引き起こすことは得策ではないというプラグマティックな(事なかれ主義的な)判断に基づいている場合が多いのではないか。ま

た、フランスだけではなくヨーロッパ各地でムスリムの移民を排斥するデモや彼ら／彼女らに対する嫌がらせが相次いでいる。さながら、「〈表現・言論の自由〉原理主義」が「イスラム原理主義」と対峙し、両者のあいだにはいかなる宥和も見いだせないような構図ができつつあるかのようだ。

「〈表現・言論の自由〉原理主義」の根底には、フランス共和国の国是とも言うべき公共圏における「ライシテ(laïcité)」「(非宗教性、世俗性)」の理念がある。しかし、「〈表現・言論の自由〉原理主義」は、世俗的市民と宗教的市民との間の対話の道を閉ざし、宥和の希望を経てしまう。それは、自らの普遍性を誇示することにより思考停止に陥る。ヨーロッパにおいてムスリムが置かれている、あるいは置かれてきた状況や、非ムスリムの住民や世俗的市民とムスリム系移民との関係性に適合的な議論かどうかについては異論があるかもしれないが、本稿では公共圏における宗教の位置づけをめぐる2009年にニューヨークで開催されたシンポジウムでの議論をもとに、「〈表現・言論の自由〉原理主義」を突破し、宗教的市民と世俗的市民の「共棲の作法」を形づくる方途を探ってみたい¹⁾。このシンポジウムは、ユルゲン・ハーバーマス、チャールズ・テイラー、ジュディス・バトラー、コーネル・ウェストが各自プレゼンテーションを行なったうえで、ハーバーマスとテイラー、バトラーとウェストがそれぞれ対話をし、最後に全体討論を行なうという形になっている。最後の全体討論はきわめて短いものであるということもあって、議論がうまくかみ合っているとか、ましてや一定の結論に達しているとは言えないが、そのなかでもハーバーマスとテイラーの主張は鮮明な対立を示している。両者ともに他方の主張に根本的なところでは同意せず、したがって双方の対立がいくらかでも止揚しているなどとはとても言えないが、それでも公共圏と宗教という大きなテーマにアプローチする手

がかりは示しているように思われる。

プレゼンテーションの順番は逆だが、ここではまずテイラーの所説を見てみよう。

2. 宗教を特別視しない多元主義 ——テイラー

長年にわたって社会学や社会理論の主流をなしてきた「近代化テーゼ」によれば、社会の近代化とともに宗教はその社会形成力を失い、個人の内面世界にもっぱら関わる形で私事化(privatization)していくとされてきた。マルクスの「資本の文明化作用」にしてもウェバーの「世界の脱魔術化」にしても、良きにつけ悪しきにつけ社会は人々の迷妄を打破する合理化のプロセスを歩むということが前提とされていた。しかし、今日世界の宗教人口はむしろ増大しており、さらに人々が信仰する宗教も個人の内面世界に蟄居することなくむしろますます政治化してきているように見える。このことは、イスラム革命以後のアラブ・イスラム世界についてのみ言えることではなく、たとえばアメリカ合州国のクリスチャン・ファンダメンタリズムの保守的政治風土に対する影響力はますます増大している。相対的に「近代化テーゼ」に沿うような歴史的展開を見せてきたように思われるヨーロッパにおいても、増大するムスリム系移民のプレゼンスは大きくなっている。むしろ世俗化が他の地域よりも進展しているだけに、世俗的市民と宗教的市民との対立は深刻化する傾向にあるのではなかろうか。

「世俗主義を根本的に再定義すべき理由」と題されたテイラーのプレゼンテーションの骨子は、世俗主義(secularism)やライシテを国家と宗教の関係と関わるものと考え、「誤ったモデル」を拒否することにある。世俗主義とはテイラーによれば、「多様性に対する民主的國家の(正しい)対応と関わるものなのである」²⁾。「多様性に対する民主的國家の(正しい)対応」と

は、何よりもフランス革命以来のおなじみの理念「自由・平等・友愛」を多様な世界観や宗教を保持する諸個人や諸集団に保障することを意味する。宗教的市民に即していえば、信教の自由の保障や、異なる信仰を持つ人々のあいだの平等の保障、社会のあり方を決定するプロセスへの参加の保障を目標にする社会、それが世俗主義的な社会であるとテイラーは主張する。宗教は多様性を構成する一部なのだから、「宗教を非宗教的、『世俗的』(もう一つの広く用いられている意味での)、あるいは無神論的な観点に対立するものとして選び出す必要はない」³⁾ことになる。多様な宗教的見解のすべてを、そしてこれもまた多様な非宗教的見解のすべてを公平に扱わねばならないというわけである。

宗教を執拗に特別視、問題視することには、宗教的支配からの解放をめざす苦闘の歴史という過去の呪縛が働いていると同時に、世俗的理性と宗教的理性を対立させて前者を優越させるという思想家たちの「旧弊」が関与しているとテイラーは主張する。ハーバーマスは宗教的見解を公共圏から全面的に排除しようとしたジョン・ロールズとこのような「旧弊」を共有しているとして、テイラーは次のように指摘する。「ハーバーマスについて言えば、彼は世俗的理性と宗教思想が認識として断絶していることを常に指摘し、世俗的理性に利点を見いだす。世俗的理性さえあれば、われわれが求める規範的結論に到達できる。たとえば民主國家の正当性を確立し、われわれの政治倫理を規定できるのである。」⁴⁾

世俗國家の公的な使用言語、すなわち國家の公用語は中立的でなければならないとする点では、ロールズやハーバーマスとテイラーとの間に違いはない。立法府に提出される法案や司法の場での判決に聖書の文言による正当化が入りこんではならないのは当然である。しかし、同時にマルクスやカントを引用することによって同様のことを行なうのも不適切である、とテイ

ラーは考える。国家の中立性を担保するためには、宗教的言語を排除しさえすればよいと考える点で、テイラーは徹底している。

国家の中立性とは基本的には多様性への応答であるという考え方は、西洋の『世俗的』な人々の間にはまだまだ浸透していない。宗教は訳のわからないもので、脅威になることすらあるという見方におかしなほどのこだわりがあるせいである。こうした見方が強まっているのは、リベラルな国家と宗教が今も昔も無数の争いを繰り広げてきたからだけでなく、宗教的なものと世俗的なものとが認識として区別されているからである。宗教の影響下のある思想は、純粋に『世俗的な』推論と比べてどこか合理的でない、とされている。こうした見方は、政治的な根拠(宗教を脅威と見なす立場)だけでなく、認識論的な根拠(宗教を誤った推論形式と見なす立場)にも支えられている⁵⁾。

テイラーは、宗教への不信感の源泉として、非宗教的理性(カントの「単なる理性」)によってのみ認識に前進がもたらされ、道徳的政治的問題にも解決が与えられるとする「啓蒙の神話」があると主張する。彼は、宗教的言説と非宗教的言説との間に合理的な信頼性という点で区別を設けることには根拠がない、と考える。「2足す2は4」という判断や十分基礎づけられたある種の自然科学の命題ならともかく、「基礎的な政治道徳を確立するのに必要な基本信条」については「誠実に筋道だって考える人々(honest and unconfused people)」の間でも合意が成立するとは限らないからである。その場合には、宗教的な根拠よりも自然主義的な根拠の方に説得力があるという理由はない、と彼は考える⁶⁾。

3. 宗教的市民に課せられる「翻訳」という「条件」——ハーバーマス

ハーバーマスによるプレゼンテーションは、『『政治的なもの』——政治神学の疑わしい遺産がもつ合理的意味』と題されている。一見すると「公共圏における宗教の力」というシンポジウムのテーマとは関わりの薄いタイトルのように見えるが、ハーバーマスは、カール・シュミットが用いた宗教色を帯びた「政治的なもの」という時代錯誤的な概念が、分化したシステム命令による民主主義の弱体化から民主主義を救うものとしてエルネスト・ラクラウやジョルジオ・アガンベン、クロード・ルフォール、ジャン＝リュック・ナンシーといった現代の思想家たちに影響を与えている事態を批判的に扱うことによって、ポスト世俗化社会における政治と宗教の関係について展望を開こうとしている。

古代帝国においては政治権力の正統性の調達のために宗教が持つ正当化の力が動員されたのだったが、「政治的なもの」とは、その際出現する「政治と宗教が融合する象徴領域」を指し示す概念である。ハーバーマスによれば、このような意味での「政治的なもの」は、資本主義的交換経済の機能的独立と宗教戦争の鎮静化の要請に対応する形で出現した初期近代国家において「中性化」され始めていた(政治が部分システム化し、全体社会との同一性を失い始めていた)のだが、カール・シュミットはそれを19世紀から20世紀前半にかけてのリベラルな体制のせいにする。したがって、シュミットの敵は「政治的なもの」を中性化によって破壊するリベラリズムである。リベラリズムは、政治から宗教的アウラを喪失させ、「形而上学的真理を討論に解消しようとする」のである。シュミットは「政治的なもの」の現代的復活の方途として「カリスマ指導者に率いられる権威主義的大衆民主主義という独特の構想を構築」⁷⁾した。

シュミットによるこのような「強権ファシズム的な構想は過去に属する」とはいえ、「現在、民主主義と法の支配に何らかの公共的な宗教的基礎づけの余地を残そうという衝動が、目立たないとはいえ広がっている」⁸⁾ことをハーバーマスは危惧する。それでは、リベラルで多元主義的な体制における政治と宗教の関係はいかなるものであるべきか。彼は、次のように主張する。

行政的政治や制度化された権力政治を乗り越える唯一の要素は、下からわき上がる公共的コミュニケーションのインフォーマルな奔流を生き生きと保つ、コミュニケーション的自由のアナーキーな行使を通じて生じる。こうしたコミュニケーションの回路を通してのみ、活力に満ちた非原理主義的な宗教共同体は、民主的な市民社会の中心における変革の力になりうる——宗教的な意見と非宗教的な意見がぶつかって規範的な問題をめぐる触発的な論争が生じ、そのことによって規範的な問題の重要性に関する意識が刺激されるならば、ますますそうなりうるのである⁹⁾。

あらゆる市民は、公共圏で宗教的言語を用いる自由を有する。しかし、ハーバーマスは宗教的言語から世俗的言語への翻訳(translation)という条件(proviso)を課せられねばならないことを主張する。「彼らは、議会や法廷、行政機関で議題として扱われ、そこでの決定に影響をおよぼすために、宗教的発言の潜在的真理内容をあらかじめ誰にでもわかる言葉に必ず翻訳するという条件を受け入れねばならない。」¹⁰⁾ハーバーマスは、公共圏における宗教的市民の宗教的発言を許容(というより歓迎)しているが、しかしそれは公共の場でのインフォーマルなコミュニケーションに限られる。集団を拘束する決定を生む場でのフォーマルな熟議のためには宗教的言語を普遍的にアクセス可能な世俗的言語に翻訳する必要がある、インフォーマルな場

とフォーマルな場を区別する制度的フィルターも必要とされる。ハーバーマスはテイラーとは異なって、明らかに宗教的言語と非宗教的言語を区別しており、公共圏における後者の優越性あるいは少なくとも相対的重要性を強調している¹¹⁾。

プレゼンテーション後の対話のなかで、宗教的理性と世俗的理性の区別をなくそうとするテイラーの主張に、ハーバーマスは何よりも反対している。その理由として彼は、宗教的理性の行使にあたってはその行使者は信者共同体の一員であること、信者共同体の中で社会化されてきたということに依拠しているということ、また宗教において最も重要な経験は祭儀実践に参加することであるということをあげている。

世俗的市民と宗教的市民との間の対話の道筋も宥和の希望も閉ざしてしまう「〈表現・言論の自由〉原理主義」を突破する考えとして、あるいはより一般的に世俗的市民と宗教的市民との間の「共棲の作法」としてテイラーとハーバーマスのどちらの主張がより妥当なのか、残念ながらここではにわかに判断できない。ハーバーマスが翻訳の必要性を説くのは、あくまで拘束力のある集団的決定を行なうフォーマルな場に対してであることを考えるなら、あるいは鋭く対立しているように見える両者の立場は架橋可能なものなのかもしれないが、およそ20年前のマルチカルチュラリズムと「承認の政治」をめぐるテイラーとハーバーマスのこれもまた先鋭な対立¹²⁾を思えば、ことはそう単純ではないのかもしれない。

注

- 1) Judith Butler, Jürgen Habermas, Charles Taylor, Cornel West, edited and introduced by Eduardo Mendieta and Jonathan VanAntwerpen, afterword by Craig Calhoun, *The Power of Religion in the Public Sphere*, Columbia University Press, 2011. (箱田徹・金城美幸訳『公共圏に挑戦する宗教——ポスト世俗化時代にお

ける共棲のために』, 岩波書店, 2014年) なお, 本稿における本書からの訳文は, 訳書のものを適宜変更している。また, 文体を講演調から論文調に変えている。

- 2) Ibid., p.36. (邦訳, 36ページ)
- 3) Ibid., p.37. (邦訳, 36ページ)
- 4) Ibid., p.49-50. (邦訳, 54ページ)
- 5) Ibid., p.51. (邦訳, 55-56ページ)
- 6) テイラーは, 脚注の中でハーバーマスを批判して次のように述べている。「しかし『自然な理性』によって『エスペラントのイデオロギー版』がもたらされたと考える根拠はどこにあるのだろうか。マーティン・ルーサー・キングを支持した世俗の公民たちは, キングが聖書の言葉で平等をといったとき, その中身を理解してはいなかったのだろうか。もしカントを引用していれば, もっと多くの人々の理解が得られたのだろうか。さらに言えば, 宗教の言語と世俗の言語はどう区別できるのだろうか。『汝の欲するところを人になせ』という黄金律はどちらのものだろうか。」Ibid., p.58. (邦訳, 196ページ)
- 7) Ibid., p.22. (邦訳, 24ページ)
- 8) Ibid., p.23. (邦訳, 24ページ)
- 9) Ibid., p.25. (邦訳, 27ページ) ここでは立ち入って論じることにはできないが, 公共的コミュニケーションに参入できる宗教共同体を「非原理主義的」なものに限定しているところにハーバーマスの所説がもつ射程の短さを感じさせる。テイラーなら, あらかじめこのような限定は設けないだろう。
- 10) Ibid., p.25. (邦訳, 28ページ) なお, この点

についてのより立ち入った論究については, Jürgen Habermas, *Zwischen Naturalismus und Religion : Philosophische Aufsätze*, Suhrkamp, 2005. (庄司信・日暮雅夫・池田成一・福山隆夫訳『自然主義と宗教の間——哲学論集』, 法政大学出版局, 2014年) 特に5. Religion in der Öffentlichkeit. Kognitive Voraussetzungen für den öffentlichen Vernunftgebrauch religiöser und säkularer Bürger (「第5章 公共圏における宗教——宗教的市民と世俗的市民の『公共的理性使用』のための認知的諸前提」) を参照。

- 11) 宗教的言説の翻訳の必要性を説くハーバーマスの主張は, その翻訳作業は一方的に宗教的市民の負担として課されるものではなく, 世俗的市民との共同作業であること, 「理性の公共的使用」を通じての相補的な作業であること, そして世俗的市民の側も自らの世俗主義や「ポスト形而上学的思考」を反省の回路の中で更新しなければならないことを強調してはいるものの, やはり宗教的市民の方により重い負担を課すものではないのか, という疑問がどうしても残ってしまう。
- 12) Charles Taylor [et al.], edited and introduced by Amy Gutmann, *Multiculturalism : Examining the Politics of Recognition*, Princeton University Press, 1994. (佐々木毅・辻康夫・向山恭一訳『マルチカルチュラルリズム』, 岩波書店, 1996年)

(たつみ しんじ)

佛教大学社会学部)